第 80 回東邦医学会総会　予稿集

令和 8 年 11 月 9 日(月)

B.　研修医発表

2.

非反復性好酸球性血管性浮腫について

加瀬 智也（研修医）
指導：鈴木 美音（総合診療・急病センター(内科)）

20 代女性。関節痛と四肢浮腫を主訴に受診し、好酸球増多を認め精査目的で入院となった。感染症、自己免疫疾患、薬剤性、好酸球性臓器障害などを除外した。MRI で筋膜炎様所見を認めたが皮膚硬化なく、若年女性・四肢限局性浮腫・体重増加などから非反復性好酸球性血管性浮腫と診断した。プレドニゾロン投与により速やかに改善した。本疾患は自然軽快するが、鑑別を要する重要な病態である。

3.

HER2 陽性局所進行乳癌治療に対する集学的治療にて長期生存及び整容性維持された１例

羽山 実倖（研修医）
指導：齊藤 芙美（乳腺・内分泌外科）

局所進行乳癌治療には局所の整容性と癌の根治性の双方を維持した治療が要求される。今回、約 19cm 大の潰瘍性出血を伴う乳腺腫瘤で受診し、ホルモン受容体陽性 HER2 陽性局所進行乳癌と診断された 40 代女性。薬物療法により腫瘍縮小を図り、広背筋皮弁再建術を応用して乳房切除術を行い 10 年以上無再発による長期生存,かつ再建乳房の形態も長期間良好に保たれている症例を経験したので報告する。

4.

DIC を契機に診断された胃癌+骨髄癌腫症の一例

小川 怜彦（研修医）
指導：繁田 知之（総合診療・急病センター(内科)）

症例は 65 歳女性。血尿を契機に受診し、著明な貧血・血小板減少、多発リンパ節腫脹、LDH 高値、DIC を認めた。骨髄穿刺は dry tap で、骨髄生検にて CK 陽性の異型細胞を認めた。上部消化管内視鏡・生検で噴門部の低分化腺癌と診断し、胃癌に伴う骨髄癌腫症と考えた。経過中に意識障害、両側硬膜下血腫を発症し、第 12 病日に死亡した。胃癌に伴う骨髄癌腫症は DIC を高率に合併し予後不良であり、早期診断が重要である。

5. **EB ウイルスとその合併症について**

岩崎 望愛（研修医）
指導：繁田 知之（総合診療・急病センター(内科)）

24 歳女性。発熱、咽頭痛、両側眼瞼浮腫、頸部リンパ節腫脹を主訴に受診した。異型リンパ球増多、肝機能障害、EBV 抗体価より伝染性単核球症と診断し、対症療法で加療した。経過中に A 群溶血性連鎖球菌咽頭炎および末梢性顔面神経麻痺を合併したが、抗菌薬と副腎皮質ステロイド投与により改善した。EBV 感染症では稀な神経合併症や細菌感染の併発を念頭に置いた診療の重要性を経験したため報告する。

6. ***Aggregatibacter aphrophilus* 菌血症から感染性心内膜炎と化膿性脊椎炎をきたした一例**

小澤 天音（研修医）
指導：柏木 克仁（総合診療・急病センター(感染症)）

70 代男性。HACEK 群に属する *Aggregatibacter* 属による感染性心内膜炎と化膿性脊椎炎をきたした症例を経験した。HACEK 群は口腔内に存在し、相対的に予後は良好ではあるが、発育が遅く培養に時間を要するため、血液培養検査での早期検出が困難である。
Aggregatibacter 属は HACEK 群の中では感染性心内膜炎の原因菌として頻度が高いとされるものの、感染性心内膜炎の症例の中では報告数は少ない。本症例と既報を比較検討し報告する。

C. 分科会報告

7. **[心臓の会]**
心臓血管外科診療の現状-集約化に求められる施設像-

片山 雄三（外科学講座心臓血管外科学分野）

医療施設の集約化は「新たな地域医療構想」における最重要テーマの一つであり、2026 年 4 月から順次施行される改正医療法により、病院の統合・再編や病床削減がさらに進む見通しとされている。地域医療構想策定ガイドラインが発出され、各自治体は 2026 年度これに基づく具体的な計画を策定される。心臓血管外科診療の現状について共有し、集約化に求められる施設像を模索する。

8. **[TOHO Neurosurgery Conference]**
小脳 AVM 破裂における血管内治療と開頭摘出術のタイミングと課題

阿部 光義（東邦大学医学部脳神経外科学講座(大森)）

21 歳男性の破裂小脳 AVM に対し，NBCA 塞栓術後に後頭蓋窩減圧術，AVM 摘出術，脳室ドレナージ術を施行したが，急速な脳幹圧迫により臨床的脳死に至り，臓器提供を行った．小脳 AVM 破裂では急変リスクが高く，迅速な減圧術を含む外科的治療戦略の重要性が示唆された．

令和 8 年 11 月 10 日(火)

H. 研修医発表

13. **壊死性筋膜炎を疑った糖尿病足壊疽を背景とした蜂窩織炎の 1 例**

山藤 綾華（研修医）
指導：小松 史哉（総合診療・急病センター(内科)）

糖尿病足壊疽を背景に蜂窩織炎を発症し、壊死性筋膜炎との鑑別を要した 1 例を経験した。LRINEC スコアは 7 点、CT・MRI でも壊死性筋膜炎を疑う所見を認めたが、全身状態および経過を踏まえ蜂窩織炎と診断し加療した。壊死性筋膜炎は早期外科的介入が予後を左右するため、画像や LRINEC スコアは補助所見と捉え、臨床所見を重視して迅速に外科へコンサルトする重要性について考察する。

14. **肺分画症の 1 例を契機とした当院における肺分画症・CPAM の過去 10 年間の臨床的検討**

田邊 順平（研修医）
指導：平林 将明（新生児科）

胎児期に超音波で高エコー肺病変を認め、CPAM が疑われたが、feeding artery の確認から肺分画症と診断した 1 例を経験した。出生前評価から出生後画像診断、外科的治療方針までの経過を報告するとともに、当院過去 10 年間の CPAM・肺分画症症例を後方視的に検討、考察した。

令和 8 年 11 月 11 日(水)

K. 大学院生研究発表

17. **経カテーテル的大動脈弁留置術後患者における ALBI スコアの有用性**

櫻井 康二郎（代謝機能制御系循環器内科学）
指導教授：池田 隆徳（医学部内科学講座循環器内科学分野）

重症大動脈弁狭窄症に対し TAVR を施行した 221 例を対象に、肝予備能・栄養状態を反映する術前 ALBI スコアと予後との関連を検討した。ALBI 高値群（≧－2.44）は低値群と比較し 1 年イベント回避率が有意に低かった（85.2% vs. 95.6%、P＝0.007）。多変量解析でも ALBI 高値は全死亡または心不全入院の独立した関連因子であり、TAVR 後の簡便な予後予測指標として有用な可能性が示された。

18. **半月板修復術の有無による高位脛骨骨切り術後アライメント変化の検討**

梅田 涼（高次機能制御系整形外科学）
指導教授：中川 晃一（東邦大学医療センター佐倉病院整形外科）

目的
HTO に併用した MM 修復術が術後中期の MM 逸脱量の変化に与える影響を明らかにすること
方法
当院で施行した HTO のうち術後中期に MRI を撮影した患者を対象とし患者背景、単純 X 線および単純 MRI を修復群 15 例と非修復群 15 例で比較検討した
結果:術前後の両群間で計測値に有意差は認めず、術後の MME ratio は修復群が非修復群より低かったが有意差は認めなかった
考察
HTO に併用した MM 修復術は術後中期の半月板逸脱に明らかな効果を示さなかった

L. 分科会報告

19. **[佐倉病院学術集会]**
佐倉病院泌尿器科ロボット支援下手術の軌跡

宋本 尚俊（東邦大学医学部泌尿器科学講座）

当院では 2020 年 9 月に RARP を開始し、600 例以上を施行している。後腹膜アプローチを積極的に採用し、1 日 2 件の RARP を安全に実施。積極的な神経温存や Hood technique、TUR-P・HoLEP 後、放射線治療後再発に対する救済手術など、幅広い症例に対応している。現在はプロクター5 名体制で、他施設の導入支援も行っている。今後も安全性を最優先に地域医療へ貢献していく。

M. 研修医発表

20. **ANCA 関連血管炎に合併した肺 *Mycobacterium abscessus* 症の１例**

木村 冴夏（研修医）
指導：卜部 尚久（東邦大学医学部内科学講座呼吸器内科学分野(大森)）

68 歳女性。X-11 年に肺 M.abscessus 症と診断。X-1 年 1 月、肺病変の増悪で当院紹介受診。3 月より AZM・IPM/CS・AMK・STFX・CFZ で加療開始。10 月に有害事象で治療中止となるが、肺病変の改善を認め、無治療経過観察とした。X 年 3 月、急性腎障害と肺病変の増悪で緊急入院。PR3-ANCA 強陽性から ANCA 関連血管炎/急速進行性糸球体腎炎と診断した。肺 M.abscessus 症と ANCA 関連血管炎の合併を経験したため文献的考察を加え報告する。

21. **初診から診断までに長時間を要した感染性心内膜炎の 1 例**

芹澤 真幹（研修医）
指導：佐藤 高広（総合診療・急病センター(感染症)）

51 歳男性。約 50 日間持続する発熱を主訴に当院を受診した。血液培養および心エコー所見から Streptococcus mutans による感染性心内膜炎と診断した。本症例は近医初診から診断まで 1 ヶ月以上を要した。診断遅延の原因を検討し、炎症反応上昇が軽度でも、リスク因子や身体所見から本疾患を想起し、Duke 診断基準を活用して早期の血液培養や心エコー実施の重要性を学んだ。

22. **水中毒で低ナトリウム血症に至った症例**

杉村 英理佳（研修医）
指導：山田 篤史（総合診療・急病センター(内科)）、矢野 麟太郎（心療内科）

47 歳男性。統合失調症の既往あり多飲傾向。意識障害で搬送され Na101mEq/L と著明な低 Na 血症を認めた。原発性多飲症では口渇閾値が低下しており、低浸透圧でも口渇が持続し飲水を続ける。浸透圧低下で ADH 分泌は抑制され過剰な水は希釈尿として排泄されるが、腎の排泄能を超える多飲で低 Na 血症を来す。本症例も尿比重低値から水中毒と診断、緩徐な補正で改善した。

O. プロジェクト研究報告

24. **マイクロセンサ付き脳動脈瘤モデルを用いた Woven endo bridge による動脈瘤壁に対する圧負荷の定量化**

藤田 聡（大橋病院脳神経外科）

脳動脈瘤の治療には血管内治療技術の進歩により FlowDiverter(FD)や Woven EndoBridge (WEB)など新たなデバイスが導入されている。特に WEB はワイドネック型分岐部動脈瘤への有効性が報告され低侵襲かつ抗血小板薬の投与期間短縮にも寄与するが、安全性の客観的評価は困難だった。本研究では、マイクロセンサを装着した PVA-H 製血管モデルを用い、治療中にデバイスが動脈瘤壁へ与える圧力を計測し、WEB の安全性を検証する。

25. **高尿酸血症治療薬の作用機序差異が慢性腎臓病進行に与える影響の検証**

植松 光（東邦大学医療センター大橋病院・腎臓内科）

CKD に合併する高尿酸血症に対する尿酸降下療法の意義は、近年再検討されている。そこで我々は、尿酸生成抑制薬と尿酸排泄促進薬の作用機序の違いに着目し、ドチヌラドとフェブキソスタットの腎保護効果を比較した後ろ向き研究を先ず実施した。本研究の成果である尿酸排泄経路を介した腎予後への影響と、今後の前向きランダム化研究の実施にあたっての計画を概説する。

P. 研修医発表

26. **妊娠中爪甲色素線条の１例**

清水 莉彩（研修医）
指導：寺田 七子（東邦大学医療センター大橋病院　皮膚科）

妊娠中に拡大した爪甲色素線条の一例を報告する。Hutchinson 徴候を認め，ダーモスコピーで爪甲近位から遠位まで均一な太さの色素線条内に不規則な細線条と黒小点があり，悪性黒色腫を否定できず皮膚生検を施行した。病理組織では爪甲内にメラニン色素沈着を認めたが，メラノサイトの明らかな異型や胞巣形成はなく，妊娠に伴う色素増強と診断した。妊娠中でも悪性が疑われる場合には生検と慎重な経過観察が重要である。

27. **スピーチバルブ使用により嚥下機能改善が認められた小児の一例**

北原 周晴（研修医）
指導：西原 友紀、柳川 靖人、山岡 達宏（小児科）、平林 将明（新生児科）

早産・超低出生体重で出生し、声門・声門下狭窄で気管切開後、咽頭軟化症が基礎疾患にある１歳男児。嚥下障害に伴う頻回の誤嚥性肺炎を認めていたが、スピーチバルブ使用で咽頭腔が開大し、梨状窩での液体保持が可能になり嚥下機能改善を認めた。本来発声目的に用いられるスピーチバルブが嚥下機能改善にも寄与した可能性についてその機序と使用方法を考察する。

28. **子宮筋腫による高度鉄欠乏性貧血、両下肢浮腫を来した症例**

松田 陽斗（研修医）
指導：柏木 克仁（総合診療・急病センター(感染症)）

51 歳女性。子宮筋腫による慢性出血を背景に、高度の貧血(Hb 3.3 g/dL)とそれに伴う高拍出心不全状態で両下肢浮腫を来した症例を経験した。輸血および鉄補充療法により改善を得たが、鉄欠乏性貧血では出血のみならず吸収不良や稀な疾患も念頭に原因検索を行い、経口・静注鉄剤の特性、患者背景や緊急性を考慮した治療選択が重要である。